

Yomo Yomo

～10代のあなたに～

オリンピック・パラリンピック

『アスリートがくれた元気が出る言葉』

あかね書房 2018年発行

さまざまなスポーツの世界で活躍する選手たちの強い信念から生まれた言葉を、エピソードとともに紹介しています。例えば、「勇気を出して、一歩ふみ出せば、世界が変わる」という言葉は、こうざいひろあき香西宏昭選手が目標に向かって努力した経験から出た言葉です。

これからの生き方に勇気をくれる言葉を見つけよう。



『話したくなるオリンピックの歴史』

コンデックス情報研究所／編著 清水書院 2018年発行

『12の問いから始めるオリンピック・パラリンピック研究』

さかうえやすひる坂上康博／編著 かもがわ出版 2019年発行

世界的なスポーツの祭典オリンピック、そしてパラリンピック。ただどうして4年ごとに開かれるんだろう？ という初歩的な疑問から、その歴史や変化、面白エピソードに歴代金メダルの図柄まで、オリンピックの知識がぎっしり。知らずに応援しても楽しいけれど、知っていればきっと、もっと面白い！



『伴走者』

あそう かも浅生 鴨／著 講談社 2018年発行

“伴走者”とは、視覚障害のある選手と一緒に走りながら、ルートを示したりする人のこと。市民ランナーのあわしま淡島のもとに舞い込んだ“伴走者”の依頼。それが、交通事故で視力を失った内田選手との出会いだった。ずっと一人で走ってきた淡島は、内田選手の目の代わりになることがいかに難しいかを知っていく。



2020年はオリンピック・イヤー！



『みんなちがって、それでいい パラ陸上から私が教わったこと』

しげもと さえ宮崎恵理／著 重本沙絵／監修 ポプラ社 2018年発行

パラ陸上の重本沙絵選手のお話。生まれつき右腕が短い彼女は小学生の時にハンドボールを始め、中学・高校とハンドボールに没頭する日々でしたが、大学2年生の時にパラ陸上と出会い、人生が変わってゆきます。瞬く間に世界選手権で入賞、リオ五輪では銅メダルを獲得。周囲の人々に支えられながら成長していく姿が心に響きます。

『とびきりおかしいマラソンレース』

メーガン・マッカーシー／作 おびかゆうこ／訳

光村教育図書 2019年発行

今から100年以上前、アメリカでのオリンピックマラソンは、今とは全然違うハプニングの連続でした。ひどい土ぼこりの舞い上がるコースやたった2カ所の給水ポイント、野良犬に追いかけられ、コース脇に実るリンゴの誘惑に負け…。

当時のオリンピックの大変さに思いをはせつつ、選手たちのドタバタ劇を楽しんでください。

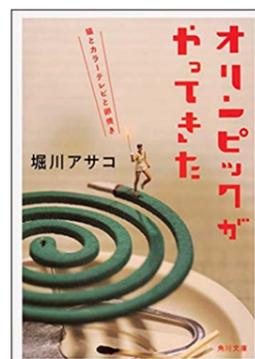


『オリンピックがやってきた 猫とカラーテレビと卵焼き』

堀川アサコ／著 KADOKAWA 2019年発行

1964年(昭和39年)。東京からずっと離れた青森の街に暮らす前田一家とその周りの人たちは、もうすぐ始まるオリンピックを楽しみにしながら家族でケンカしたり友達関係で悩んだり、片思いにオロオロしたり…。

今でもどこかにありそうな、だけど今はもう遠い56年前のオリンピックイヤー、昭和の日常の物語。



編集・発行：箕面市立図書館 箕面市立小・中学校図書館

問い合わせ先：箕面市立中央図書館

TEL 072-722-4580 FAX 072-724-9697

発行日：令和2年(2020年)1月

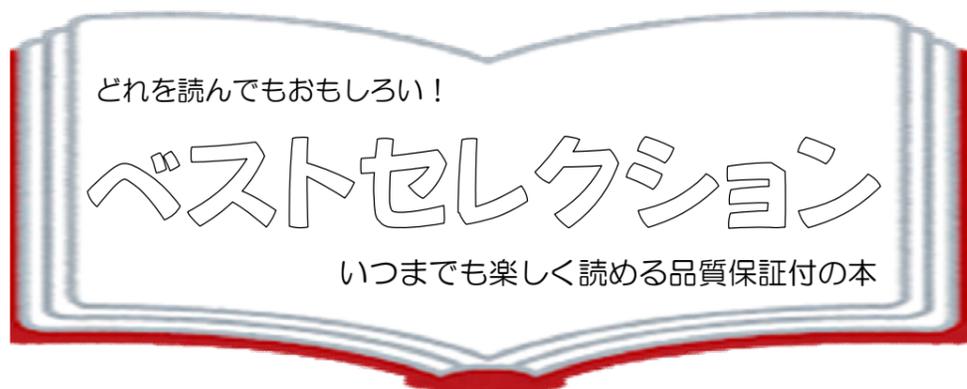


箕面市立図書館
ホームページ

☆YomoYomoは箕面市立図書館のホームページからも確認できます。

箕面市立図書館 おすすめの本

検索



『クレヨンで描いたおいしい魚図鑑』

加藤休ミ／著 晶文社 2018年発行

魚を愛するクレヨン画家、加藤休ミさんがリアルに描いた、魚の世界へようこそ。この図鑑は魚たちの人生、つまり海から食卓までの一生「魚生」の晴れ舞台。今にも香ばしいにおいがしてきそうなおい、とても絵だとは思えない魚料理となった彼らの姿。眺めていたらよだれが出てきそう。



『愛×数学×短歌』

横山明日希／編著 河出書房新社 2018年発行

「平行線 1° 動けば交差する だから私も一歩踏み出す」
一見無関係に見える数学と短歌が組み合わせあって、こんなにも素敵な愛の歌ができました。勇気を出して一歩踏み出せば、いつもと違った日常が訪れる。そんな明るい未来が感じられる歌ですね。ページをめくりながら、お気に入りの短歌をそっと口ずさんでみてください。



『トンネルの向こうに』

マイケル・モーパゴ／作 杉田七重／訳 小学館 2018年発行

第二次世界大戦中のイギリス。空襲で焼けだされた男の子の乗る汽車が、真っ暗なトンネルの中で停車する。闇を怖がる彼に、見知らぬおじさんがマッチの光の中である兵士の話をしてくれる。それは、戦争の責任が自分にあると苦悩する男の物語だった。

ヒトラーを撃たなかったとされる実在の人物をモデルに描かれたフィクション。



『ヴンダーカンマー ここは魅惑の博物館』

かしざき 榎崎 茜／著 理論社 2018年発行

職場体験で、興味もなかった博物館に行くことになった5人。漁師から電話がきて深海魚と対面する育実、骨格標本をつくるためにプライドチキンを食べまくる円佳、最初は暇だったけど学芸員の話聞いていたら化石を探すのが楽しくなってきた恋歌など、博物館の仕事を通じてそれぞれ違った体験をします。博物館の仕事って、なんだ？

『ナイスキャッチ!』①～⑤

よこさわ あきら 横沢 彰／作 新日本出版社 2017～2019年発行

こころは、人と関わることを避けて過ごしている中学一年生。ある日校庭のかたすみでスケッチをしていたら、突然何かが降ってきた。「ナイスキャッチ」と言われてふと見ると、手には白球が…。野球なんかやったことのないけれど、本気で向かってきた哲平の真剣な球をもう一度受けてみたい。こころは、美術部から飛び出した!



『セカイの空がみえるまち』

工藤純子／著 講談社 2016年発行

空良はある日、学校帰りにいつもと違う駅で降りてしまう。初めて目にする国際色豊かで、外国語があふれる店や通り。そこで出会ったのは同じクラスの翔だった。家族に黙っていなくなった父のことが頭から離れない空良と、自分の母親が誰か知りたい翔は、このまちの住人との関わりの中で、少しずつ前に進んでいく。



『泥』

ルイス・サッカー／作 千葉茂樹／訳 小学館 2018年発行

マーシャルとタマヤは学校の帰り、何かの研究施設がある立ち入り禁止の森を通り抜けようとするが、いじめっ子のチャドに見つかってしまう。追い詰められたタマヤは、泡が浮いたタールのような黒い泥をチャドの顔に投げつけた。二人はなんとか逃げ出せたが、その後、泥をすくった彼女の手に異変が起きる。

